

白川静のことば

《15》



金子都美絵・画

白は「説文」に「西方の色なり」とし、字形は入と二より成り、陰の数を示すとする陰陽五行説による解を試みているが、その形は頭顱の象で、伯の初文。また白色をいう。白を拇ほ、親指の爪の形とする説もあるが、それは百の字形からの類推である。数字は五以上はすべて仮借。百も白の声を用いているものである。伯は霸は（霸）と声義同じく、五霸をまた五伯という。霸の初文は鞏は。鞏は雨ざらしとなった獣の革を示し、暴露して色の白きをいう字である。その生気を失った白色は月色に似ているところから、月色を覇という。鞏に月を加えた形である。金文に月の盈虚の相によって月を四分し、初吉・既生霸きせい・既望・既死霸きじというのは、初吉の吉は詰きつにしてようやく月の形のあらわれるをいい、既生霸は月色の半弦を超えるをいう。望は満月、望後を既望、また月色の半弦より減ずるを既死霸という。白・伯・霸はみな一系の語である。

『漢字の世界』平凡社ライブラリー P172

